

至誠

明治神宮武道場
至誠館 館長

荒谷 卓

公德心の希薄化する社会

先日、ロシアで1週間、至誠館の国際武道セミナーを開催した。夏のフランスでの国際武道セミナーと共通して感じるのは、欧州でもロシアでも、「現在の社会の仕組みは本当に公共の利益になっているのだろうか?」「われわれのリーダーは本当に公共心を持った指導者としての資質を備えているのだろうか?」という基本的な疑問を抱く人が増えている。

富の偏在や社会の不正さが増大し、指導者の無策に対する人々の不満が高まる中で、社会全体の仕組みやリーダーの資質に対する根本的な不信任感が世界中に蔓延している。

そして社会生活をする上での守るべき規範である公德心がますます希薄になっていく中、己を捨て「忠孝」に生きる武道精神に救いを求める風潮が強まっているのである。

一般的に自国の歴史や伝統文化に対する誇りが強い人は公德心も強く、反対に個人の利益を優先させ、個人主義的な傾向の強い人は、自国の歴史や伝統文化に対する誇りも低く、公德心も弱いという傾向が各国で共通して見られる。

武道セミナー参加者たちは、「彼らがいなければ、今私たちは此処にはいない。郷土を守るために亡くなった先人たちの魂を忘れてしまうような、そんな不徳な生き方はできない。しかし、競

武術と道徳の体感的学習法

しかし、この精神を具体的かつ体系的に後世に伝え、教育する仕組みが、欧州でもロシアでも欠落している。例外的に軍隊の教育の中に一部残っているが、それも法的強制力に依拠した極めて限定的な側面に過ぎず、社会一般に開かれた形で適用可能な教育方法とは言えない。

もちろんロシアにおいても、教育の場で教師が生徒たちに道徳心について語り、教会で道徳や信仰について話を聞くことは可能である。しかしそれらはいずれも受動的に話を聞くだけで、主体的精神の育成とは全く次元の違うものであるということ、彼らは理解している。

彼らは、肉体を鍛える以上に精神を鍛錬することを目的としている武道は、公共心を育て、社会のために生きる精神を養うことに直結するものだ」と認識しているのだ。

確かに武道は、武術の技を通じて道徳心を育てるという独特の効果を兼ね備えている。実際に「敵を倒そう、相手をやっつけよう」という気持ちで技をかけても、相手は反発心を強めるので質の悪い力技にしかならない。

逆に相手の心を知り、相手の立場に立つて技をかけると、その相手は抵抗する気持ちもなくし、自然に倒れる(結果として非常に効果的な技となる)。

利己主義の強い人と、道徳的な高みに達している人とは、技の切れ味に雲泥の差が出てしまう。

これはこの文章を読んだだけでは意味が分からないように、実際に体験して初めて理解できることである。つまり武道は、自己を犠牲にしても人の役に立つ生き方を、単に知識として理解するだけでなく、体験を通じて体感的に会得する効果を持つ教育法であり、ロシア人たちはその効果を十二分に理解して武道の稽古に励んでいるのである。

公共心を育てる教育手段としての武道

この武道セミナーは、ロシアでこの武道のエッセンスを広める指導者を育成することを目的としているため、参加者も

100名を上限として設定されている。

当然ロシア各地域の指導者層だけが参加するものと思っていたが、見るとその割以上の11-12名が10代の子供たちであった。しかもセミナーは、すでに夏休みが終わり、学校が始まっているはずの10月に開催されている。

「これはどうしたことか?」と主催者に問い質してみると、この子供たちの親は学校を1週間休ませて、このセミナーにご子息たちを参加させているということだった。

「こんなに貴重な教育の場は他にない。知識をつけるだけの学校教育よりもはるかに重要です。子供にこそ、正しい精神教育を受けさせたい。その一心で参加させた。学校を休ませてでも参加させる価値があるのだ」と切々と訴えておられた。

ちなみに、このセミナー(必要経費のみで収益を求めない)の企画者によると、講習料は日本円で2万円ほどで、ロシアの地方公務員の約1カ月の給与に相当するという。ということは、学校を休ませ、公務員の1カ月分の給与を注ぎ込んでも参加させたい、それほど価値のある機会だと彼らが考えているということなのである。

実際、セミナーでは、参加した大人たちが、「子供たちが見ているのだからよき模範となるよう道徳的な姿を見せるのだ」と互いに叱咤激励し合いながら、子供たちの存在でさらに精神修養に磨きをかけている姿が見られた。

ロシア人たちがこのように武道に取り組んでいる様子を見るにつけ、武道がいかに精神教育の手段として完成されたものであるのかを改めて思い知らされた。と同時に、知識教育以前に人間としての公德心を育てる武道が注目されているのは、そうした公德心の欠落した指導者が跋扈している現在の状況を反映しているのだとも言える。

日本武道の持つ社会的意義を見直せ

日本では戦後教育の中で、軍隊や武道は否定的に捉えられる風潮がいまに残っている。

戦争放棄をうたった憲法九条の精神は、インド独立運動のガンジーのように、自己を犠牲にしても武器の前に無抵抗で戦う崇高なる非暴力の精神とはまったく無縁のものである。九条は人権という美名の下に、社会集団に対する犠牲的精神を嫌うエゴイストを正当化し、「精神価値の放棄」を日本人に促した。

また、「一方が「戦わない」と宣言すれば戦わなくて済むという空想を当然視させた。憲法九条の精神では、理不尽を正すためには戦いも辞さないという発想はまったく出てこないだろう。

結局、戦後の日本人が憲法精神に従って放棄したのは「戦争」ではなく、「戦うことも辞さない正義心を持った生き方」なのではないか。戦後の日本では、「世のため人のた

め」に精一杯尽くすことを善とし、「少なくとも人様に迷惑をかけないように」と教えていた日本の社会道徳は、「自分のためにだけ生きる」憲法思想に取って代わられ、自己の経済的欲望を最優先する輩(やから)が日本を占有している。

日本人本来の美しく強い精神文化である「家族のような国を創ろう」という神武天皇建国の理念や、「正しいと信ずることを貫き通すためには、自分の肉体の生死など気にかけない」という武士道の犠牲的精神は憲法思想の敵として追い詰められてきた。

しかし、西欧人やロシア人たちは、「公共心を捨てて富の収奪にだけ走った人たちが権力を独占し、世界を動かしている現在の状況は社会のためにならない」と、現代社会の病理の根本原因を正確に認識している。そしてその病理から社会を糺す解決策として、日本武道の役割を先入観なしに正当に評価しているのである。

わが国よりはるかに深刻な社会的危機に追い込まれている彼らが、この状況から脱するためには、「公德心を育てる教育が不可欠だ」という結論を導き出し、「どうしたら公德心を育てることが出来るのか」について必死に思い悩んだ挙句、日本の武道に光を見出しているのだ。

日本武道の持つ社会的意義について、本家である日本自身が覚醒すべきときが来ている。